

「それでは本日の議題ですが ……」
議長の淡々と会を進める声と、どこかのクラス委員の意見を交わす声、そして時折、カツカツと書記が黒板に白い文字を書く音がする。私はそれらを『音』として聴覚で感じてはいたものの、具体的に『何が』とまでは認識していなかった。
有り体に言えば右から入って左に抜ける状態。
普段の私であれば、よっぽどの事がない限り真面目にも聞かし決議されたことを事前に渡された資料、あるいはルーズリーフにメモしたりもする。その、普段ならば出来ているはずのことが手につかない。
逆に言うと今の私には『よっぽどのこと』が起きている、ということになる。

あれから一週間と一日が過ぎた。
こなたに告白したという彼は、こなた程ではないもののゲームも漫画も好きらしくあいつとも話があうみたいだった。「みたい」というのは、私が直接確認したわけじゃなくつかさから聞いた話だから、私自身はこなたと、その彼が視界に入るたびに目を閉じ、耳を塞いで逃げ出していたから。

一週間以上が経った今でも、私の中でも芽を出した感情に名前は付けられていない。ただ、それは育てているつもりがなくとも、日毎に少しずつ成長しているみたいだった。

何かが決まったらしく、パチパチとひかえめな拍手が普通の教室よりも幾分か広い視聴覚室に寂しく響く。ふと、ぼんやり資料に落としていた視線を上げ、夕方といえる時刻になった窓の外を見た。
夏の終わりを告げる蝸の鳴き声がどこからか聞こえる。
薄い雲がいくつかふわふわと浮かび、鳶がゆったり上空を旋回している。
こなたが、一人教室で待っていた、あの時程ではないけど赤く染まった太陽が空を、雲を青や白から橙色に塗り替えていって、怖いぐらい綺麗だった風景の中、あいつは何を思っていたんだろうかと考える。所詮、私は私でこなたはこなたなんだから答えなんて出ないのだけれど。

「み……ん…か…みさ…かがみさんっ」
「ひあっ！！？」
突然現実へと引っ張り戻した大きめの声に、声帯と肩、そして背中中の筋肉が反射的に反応しガツと椅子の揺れる音と共に、私は悲鳴をあげてしまっていた。
余りにも人を引き付ける力を持った風景に、心奪われるうちに
委員会は終わってしまったらしかった。
会が終わった開放感と、それと同時に感じる疲労感で教室が一杯になっている。
私の顔を心配そうに覗き込むB組の委員長 高良みゆきに苦笑を浮かべつつ手を振る。
「ああ、ごめんみゆき、少しぼうっとしてたわ」
「そうですか？それなら良いんですが、具合が悪くなられたのかと思ひまして…」
「本当ごめん！大丈夫だから。あ、頼みがあるんだけど…今日の決定事項とか、後で見せてくれない？」
「それは構いませんが……。…かがみさん、この後ご予約とかありますでしょうか」
みゆきの問い掛けに私は首を傾げた。つかさやこなたから、こういう風に言われてどこかに寄ったりすることはあっても、みゆきから言ってくるのはめったにないことだったからだ。

「ない、けど……どうしたの？」
「それは…あ、少し待って下さいませんか？」
私の疑問に言葉を濁し、さらに返事を聞く前にみゆきは踵を返していた。
他のクラス委員は既に教室から居なくなっていて、一人ぼつんと取り残された私はまた窓の外を仰ぎ見る。
空は、橙色からあいつの髪の色よりもちょっと濃い群青色に変わりゆく途中だった。

「お待たせしてしまい、申し訳ありません。…ミルクティーで宜しかったですか？」
しばらくしてみゆきが戻って来た。手には二本のミニペットボトルが握られていて

どうやら下の自動販売機で買ってきたらしかった。

「あ、そんな気を遣わなくてもいいのに...」

「いえ、私が呼び止めたんですから、どうかお気になさらずに」

それに、少々長くなりそうですし、と言いながらみゆきが片方のミルクティーを差し出して来て

私は躊躇いつつもそれを受けとる。

パキッと小気味よい音と共にペットボトルの蓋が開けられ、
中身を一口口に含んだみゆきが、間違っていたら申し訳ありません、と
前置きをして話し始めた。

「.....泉さんと何か、あったんですか？」

「！！！」

いきなり、しかもここ数日悩んでいたことの核心に触れられ

驚いた私は、キャップも開けず手の中で弄んでいたペットボトルから視線を外しみゆきの方を凝視
した。

「な、んで.....」

「...気のせいじゃなかったようですね.... 泉さんの様子も気になってまして...」

「.....」

こなたの名前が出たことで、私はより一層緊張した。ペットボトルの蓋を開ける乾いた音が
酷く場違いなものに聞こえる。体温で大分温くなった中の液体で唇と喉を湿らす。
喉を通していった液体に初めて、私の喉がからからに渴いていたことを知らされた。

「泉さんにも...おせっかいだと思われるかもしれませんが...」

お話を伺ったんですが、上手くはぐらかされてしまいまして」

ごく、と知らず唾液を飲み込む、その音がやけに大きく響いて

慌てて、咳込むふりをしてごまかした。

私は先刻から何も話していないけれど、みゆきは意にも介さないように話を続ける。

「実は、泉さんとかがみさんの様子が以前と違うことには

大分前から気付いていました。かがみさんは、約一ヶ月前から、

泉さんはそれよりもさらに前から」

「最初は何か...小さな争いがあったのか、とも思いました。

ですが、それはお二人の問題。当人同士が解決しなければいけないものです。

私が口を挟むべきではない、と考えました。

しかし一ヶ月以上が経っても一向に以前のような気配がありません。

争いとは違うのではないか、という思いが生まれました」

そこでみゆきは一度口を閉じ、何かを振り払うみたいに目を閉じ

二、三度首を振ってまた、言葉を紡ぐ。

「私が、介入すべき問題ではないのかもしれませんが.....今のお二人を見ているのは
辛いです。また、以前のように楽しそうにお話する泉さんとかがみさんが見たいんです。

...差し出がましいようですが、お二人の間に何か、あったんですか？」

その問いは二度目だ。だけど、私自身何がどうなのかよくわかっていない。

私の中に渦巻くこの気持ちは？

こなたの行動の理由は？

疑問が有りすぎて何から話していいのかわからない。「...断片的でも良いんです。人に話すことで
楽になることもありますから。

もし、話したくないのであれば無理に、とはいいません」

ああ、みゆきは、

この友人は、私たち二人のことをこんなにも思ってくれている。

そう思ったら、両親にも、まして妹には言えなかった言葉が

涙と共に一気に溢れ出していた。

「...っ！！わ...私っ.....あいつに...っく、こなたに、告白されて...っ

友達としか思えなかった、のに、拒絶、したのに...それでももやもやしたのが残って.....！

どうしたらいいのかわかんなく、て.....っ！」

一度崩れてしまった堤防は水を止める術を持たない。胸にあったものを全て吐き出す私の言葉と言う名の水 いや、しゃくり上げていたせいで単語すら怪しかったかもしれない
を
みゆきは辛抱強く最後まで受け止めてくれた。

すん、と時折鼻をすする私と、時計だけがこの部屋に存在する音源。
私はいつの間にかみゆきに抱き締められていた。こういう風にされるのは小学生、下手したら幼稚園の時以来だな、と思う。
...訂正。こなたはぺたぺた引っ付いてきてたりしたっけ。
けれど、こなたとは違う、母親が子供をあやすような抱擁。小さい子扱いされてるみたいだけど不思議と嫌な感じはしなかった。恋人同士のその胸の高鳴りの代わりに、なにもかもを預けられる安心感がある。

「.....落ち着き、ましたか？」
「ごめん、みゆき...。...はは、情けないわね」
同級生に縋り付いてわあわあ泣いていた自分の姿を脳裏に描いて
恥ずかしさに、なるべく軽く笑って体を離れた。
「いえ、良いんですよ」
にっこり笑うみゆきは、同い年とは思えない程の母性や包容力を持っている。聖人君子というよりは聖母マリア様。今の私にはそんなイメージが浮かんでいた。もっとも、どっちも似たようなものなのかもしれないけれど。

「...かがみさんは、泉さんが嫌いですか？」
「嫌いなわけではないじゃない」
これは、自信を持って言えること。
「では、好きですか？」
「好き、ではあるんだと思う。ただ...その『好き』の種類がわからないっていうか...
...近くに居すぎたせいかしらね」
大泣きして落ち着いたおかげか、前よりもすんなり言葉が出て来る。
まだまだ曖昧だけれど、それでも心の中のもやもやの輪郭が見えた気がした。

「それをそのまま伝えれば良いんですよ。言い方は少々厳しいかもしれませんが、今のかがみさんは.....もちろん泉さんもですが.....中途半端に逃げているだけです。
恋人としても、友達としても付き合えていない...」
さっきとは打って変わって、真面目な顔をしたみゆきがじっと私を見つめて来る。
目を逸らしちゃいけない気がして、私も瞬きもせず見返す。
「それでは泉さんもかがみさんも傷付くだけです。
ですからかがみさんは...泉さんともう一度、向き合うべきだと思います。
.....なんて、偉そうにすみません」
「ううん...その通り、だから、考えとてみれば、私ずっと気を遣ってた。
普通に接しているつもりでも、どこか腫れ物に触る態度で...
それは、こなたも同じだと思う。だから、明日こなたと話をしようと思う。
私の気持ちをぶつけてこようと思う」
そう宣言すると、みゆきはまたいつもの優しい笑顔を私に向ける。

「その結果の関係がどうであろうと、お二人なら大丈夫ですよ」

みゆきに何度もお礼を言ってから家路に着く。一ヶ月前とは違い心はさっぱりしていて、なぜだかとても穏やかな気分。
玄関を開けると、ちょうど台所から出て来たらしいつかさとばったりあった。

「お姉ちゃん、お帰り。今日は遅かったね.....って、目、真っ赤だよ！？
どうしたの!？」
「ただいま。あー...これは...色々あって...」
まさかみゆきの胸で大泣きしていたとは言えない。そしてその理由も。

姉としてのささやかなプライドだ。

「...こなちゃんと何か、あったの？」

靴を脱いでいる私につかさが近付いて、少しだけ声のトーンを落として話し掛けてくる。

「違うけど...もしかしてつかさ、私とこなたの様子が変だとか思った？」

「.....うん、ちょっと前からお姉ちゃんもこなちゃんも

なんか無理して笑ってるみたいだったから...」

...まさか妹にまでバレているとは、ぼんやりしてることも多いつかさだけど

今回はそんな妹にすらはつきり解るほど変だったのか、私たちは、

「さっき、みゆきにもおんなじこと言われたわ、

で、発破かけられちゃった、

大丈夫、明日、こなたと向き合ってくるから、

.....心配かけちゃったわね」

「ううん、私も今のお姉ちゃんとこなちゃんを見てるのは辛いから.....頑張ってるね」

私たちのことをまるで自分のことのように心配するつかさに、また感謝の涙が滲みそうになる、

それをぐっと抑えて、涙の代わりにありがとう、と呟いた。

その夜、私が寝るには早い時間に部屋のドアがノックされ、

続いて枕を抱えたつかさが入って来た。

「えへへ...お姉ちゃん、今日は久しぶりに一緒に寝てもいい？」

机に向かって明日のことを考えていた私はくす、と苦笑を漏らして立ち上がりベッドに入る、

「全く、しょうがないわね、いいわよ、一緒に寝よ？」

知らない人から見れば姉に甘える妹の凶なんだと思う。でも、違う。

本当に甘えているのは私の方だ。つかさは無意識にかもしれないけど、敏感に

不安な私の気持ちを察知して、こうやって支えてくれているんだと思う。

甘えるのが下手な私の代わりに、

電気を消したつかさが私の隣に潜り込んでくる。

ぼそぼそと、そうする必要なんてないのに小声で話す姿は小さい頃に帰ったよう。

「ねえ、つかさ、好き、ってどういうことなのかな？」

「ふえ？す、好き？」

「っていうか...友達としての『好き』と恋愛感情としての『好き』の違い、かな」

まだ暗闇に慣れない視覚の中、隣でつかさのもぞりと動く気配がした。

きっと、一生懸命考えてくれているんだろう。

「...んー...全然違うと思うよ？」

恋愛感情で好きになると、その人が居るだけでドキドキするし

...毎日が楽しく感じられる、かな」

一つ一つ確かめるように言うつかさの言葉はとても実感が籠っていたけれど、

やっぱり私には、いまひとつピンとこないものだった。

「...つかさは、恋、してるの？」

「うん、してる。大好きな人がいるんだ」

漸く暗さに慣れてきた私の目に映った微笑む妹の顔はもう、雛鳥みたいに私の後を付いてきていた

甘えん坊の表情じゃなかった。

どくん

心臓が高鳴る。自分で決めたことのはずなのに、投げ出してしまいそうになる。

私はB組の教室、こなたの右隣りに座っていた。時刻は12時半。

いつものメンバーでいつもの昼食。違うところは私の心中だけ。

今日はある意味で、私とこなたの關係に終止符を打たなければならない。
そのためには、こなたを誘う必要がある。

どくん

まただ。口を開こうとする度に心臓がきゅうっと収縮して、臆病な私が顔を覗かせる。
ちらりとみゆきとつかさの方を見ると私を勇気付けるように頷いてくれた。
それに励まされた私は、大きく息を吐いてから、普通を装ってこなたに話し掛けた。

「こなた」

「んー？ なにかな？ かがみんや」

「.....今日の放課後時間、ある？」

「.....なんで？」

途端にこなたの顔が強張る。でも、それも今日でおしまいにはしないといけない。
私のために。それに、なによりこなたのために。

「大事な話がある、から....。放課後、校舎裏に来てくれない？」

「.....わかった.....」

瞬く間に時間が過ぎていった。きっとそれは間近に迫る秋という季節のせいだけじゃないはずだ。
みゆきとつかさは邪魔しちゃ悪いから、と一緒に帰っていった。
あの二人も上手くいけばいいな、と思う。昨日のつかさの表情を思い出して
自然にそう考えた自分に驚いた。ちょっと前までは同性同士というだけで
恋愛対象にはならない、と思っていたのに。

「ごめん、待った？」

校舎の影から通学鞆を持った青い髪の小さな少女が小走りでやって来る。

「ちょっとだけね」

「それで、話して何？」

校庭の方からどこかの運動部の掛け声が聞こえて来る。

蝸の鳴き声はもうしない。代わりに鈴虫やキリギリスが季節のメロディを奏で始めている。

夕日が、長い影を私とこなたの足元から作っていた。こなたの表情は

普通ならば逆光のせいで見えないはずなのに、距離のせいか不思議とよく解る。色々考えたけれど、
言いたいことは結局上手くまとまらなかった。

だから、思ったことをそのまま伝えよう。

早いリズムを刻む心臓。汗が伝う背中。唾液の出ていない口内。

それらを全部無視して、私は漸く一步を踏み出した。

「ごめん！ 私、こなたに謝らなきゃいけないことがある。

いつも通りにする、って言ってて全然出来てなかった。余計にこなたを傷付けた。ごめん...！！」

「そんな...わ、私も...私こそ、かがみに謝りたい...！！」

私が一息つけるのと同時にこなたが叫んだ。

その姿がいつかのこなたと重なって、目頭が熱くなる。

「私っ.....私もかがみに言ったこと出来なかった...！ 拒絶、されたのに

諦められなく、て...告白された時、よかったと思った。

付き合っちゃえばかがみのことも忘れられると思った。友達として付き合ってみただけ...だけど

全然、ダメで...。話しても、かがみと比べちゃって...っ。

かがみのこと、もう、友達とは思えないよ...ごめん...っ」

一言喋る度に大きな瞳に涙が溜まり、声には泣き声が混じる。

違う。私はそんな顔を、声をさせるためにここに来たんじゃない。

「...もう一つ、謝りたいことがあるの。私、こなたに告白された時女同士だからとか
そんなことで最初から考えないようにしてた。

あんなにも真剣なあなたにちゃんと向き合ってたかった」
そこで私は一息を吸い込んで、私が本当に言いたいのはここからだ。
「あなたと、あの彼と一緒に居る時もやもやした気持ちになった。
...多分、嫉妬。.....私はあなたのことが好き、なんだと思う。
だけど正直どういう意味の『好き』なのか私自身よく解ってないの。
.....だから、もしあなたが私のことを本気で好きなら.....惚れさせてみなさいよ」

そう、これが私の出した答え。正直な気持ち。そして、後はあなた次第だ。
羞恥も、なにかもかなぐり捨てて一気に言ってあなたを見つめる。
あなたは涙も引込んだみたいで、呆けた顔をして私を見てる。
「.....か、がみ、それ、って、私にもまだ可能性はある、ってこと？」
「...ま、そうね、せいぜい頑張って私をときめかせてみなさい？」
「.....っ！！かがみっ！！」
「な.....んっ.....」

体を震わせたあなたが飛び付いてきて頬に、不意打ちのキスをされた。
一瞬、触れ合うだけのそれが離れてあなたがくふ、と笑う。
前みたいな、日だまりの中に咲く一輪の花のような本当の笑顔で。

「絶対落としてみせるからっ！覚悟しててよね？」
キスまでしたくせに、恥ずかしいのか
頬を夕焼けよりも赤く染めてあいつは走り去っていった。

「そう簡単に落とされてたまるもんですか」
口調とは裏腹に、笑っている私は端から見れば怪しいことこの上ないに違いない。

この前よりもいきなりのキスなのに
不思議と嫌じゃなかったのは まだもう少し言わないでおいでこころ。

コメントフォーム

名前:

コメント:

投稿

- うん、普通に考えて、みwikiさんでしょww -- 名無しさん (2010-09-06 17:44:34)
- つかさの好きな人は、みwikiさんですよw -- 名無しさん (2010-08-30 13:01:55)
- そんなで結局つかさの好きな人って誰よ？ -- 名無しさん (2008-08-29 19:52:09)
- よかったね、めでたしめでたしだ。 -- 名無しさん (2008-08-29 00:23:25)